

ガンツウ5年 順風満帆

尾道発着 宿泊型客船

せとうちクルーズ(尾道市)の宿泊型客船「ガンツウ」が就航5周年を迎え、存在感を強めている。瀬戸内海限定の周遊や1人数十万円からの高級路線は、大都市を拠点にする国内他社との違いが際立つ。新型コロナウイルス禍で海外志向だった旅行者の需要も取り込み、5年間で約7400人が乗船した。2022年は過去最多の約2400人を見込む。(神田真臣)

ガンツウは尾道の中心部から車で30分ほどのベラビスタマリナを発着。厳島神社(廿日市市)参拝や村上海賊の城があった能島(愛媛県今治市)周辺での潮流体験、石材業で栄えた北木島(等岡市)の散策を楽しめる。ネブト(テンジクダイ)やマナガツオを使った瀬戸内海ならではの料理を味わえ、1人2泊50万円台から提供する。17年10月に就航した。18年に約

今年は過去最多2400人予想

高級路線 需要取り込む

1300人、19年は約1600人と順調に伸びたが、20年3月から新型コロナウイルス禍で暗転し、4カ月間運休した。一方で海外に出たくても出られない客層の取り込みに成功。同年に約900人、21年は約1700人とほぼ倍増し、今年も好調だ。利用者の中心は関東や関西の50〜70代でリピーターが目立つ。

1泊以上するクルーズ船の寄港回数を調べている国土交通省によると、ガンツウだけが寄るベラビスタマリナは18年に122回で全国7位、19年は100回で9位。横浜や神戸に水をあけられていた。それが20年は53回、21年は82回でいずれも1位に躍進した。同省の調査対象となった国内企業のクルーズ船は、ガンツウを含め4隻。ガンツウが定員38人の約3千トに対して、他船は国外と往来できる定員500〜800人

クリック
ガンツウ 全長81・2尺、3013ト、乗客定員38人。切り妻屋根が特徴で、壁や天井に木材をふんだんに使い、露天風呂や縁側がある。業界的には小ぶりだが「瀬戸内を味わえる最大限の大きさ」として建造した。ツネイシホールディングス(福山市)子会社のせとうちクルーズ(尾道市)が運航する。

台の2万〜5万トクラスの船で、関東と関西を拠点とする。同省産業港湾課は「小ぶりでも1万ト程度が世界で一般的。瀬戸内限定なことも含めて珍しい形態」としている。

今後は新型コロナウイルスの水際対策緩和への対応が課題となる。小林敦総支配人は「旅慣れた層から注目を集め、国内の認知度は高まった。瀬戸内の文化や歴史の観光資源を前面に、顧客の開拓と定着を図りたい」と見据える。

広島サミット・万博追い風

小林総支配人に展望など聞く

小林敦総支配人に今後の展望や瀬戸内インバウンド向けに旅行会社への営業の可能性について聞いた。

―国内外で人の往来が活発となってきた。

2024年まで円安が続くとみており、インバウンド(訪日外国人客)に対しては好条件だ。来年、広島市で開催される先進7カ国首脳会議(G7サミット)や25年の大阪・関西万博で、西日本への注目が高まる点も追い風になる。

―どのように売り込んでいきますか。

19室の小さな船なので、プレゼンテーションの工夫や販促資料の充実など、量より質を重視している。紹介や口コミにも期待する。国内では一定に認知された。

地域外の人には瀬戸内の日常が新鮮に映るようだ。沖合で横付けした漁船から食材を仕入れる光景や、離島の島民との何げない会話が楽しめる散歩が喜ばれている。地元との協力と連携があるからこそ、プランとして成り立つ。どこにもない船を造れたと考えている。



就航5周年を迎えたガンツウの前で、今後の展望を話す小林総支配人

(撮影・井上真博)